

谷崎潤一郎と『万葉集』の時代

梅田 径

一 はじめに

本稿は谷崎潤一郎の『万葉集』を中心に上代文学との関わりを検討し、谷崎における古典文学受容の一端を明らかにするものである。

谷崎潤一郎が、大正一五年（一九二六）の関東大震災をきっかけに、関西へ移住した前後の時期、それまでの西洋的モダニズムを是とする価値観から一変して、日本古典文化への傾倒を深めていったことはよく知られている。しばしば「古典回帰」と呼ばれるこの時期は、厳密に関東大震災と連動するわけではないものの、これ以降関西弁や古語を駆使しながら、現代口語との調和を計ろうとする独特の表現が生まれることになる。この試みは古典文学の世界と現代文学の時空を結び合わせながら、戦中から書き始められた『細雪』⁽¹⁾や、三度にわたる『源氏物語』の現代語訳へと結実していった。

『刺青』でのデビュー以来、多数の歴史ものを著してきた谷崎は、関西生活を経て『源氏物語』を頂点とする平安期文学を頂点として、さらに『平家物語』のような中世文学や、馬琴、芭蕉、西鶴といった近世を代表する諸作家にすら、王朝的美学に連なるような要素をも認めつつ、その現存を古典芸能にみるという古典観を育んでいった。関西移住は江戸文芸や古典芸能への追慕を深めた側面もあつたものの、基本的には平安中期の物語や和歌を最高峰として考える路線を踏襲していたといえる。ただし、この古典文化観からほとんど見えなくなってしまう領域が少なからずあつたことも無視すべきではない。例えば仏教や神道といった宗教文学、そして『万葉集』をはじめとする上代文学である。

『万葉集』と谷崎との関わりについての専論は管見に入らず、また分厚い「古典回帰」論をめぐる研究史上においても、ほとんど言及されることはない⁽²⁾。むしろ、谷崎は『万葉集』に対す

る敵愾心を強くもっていたようで、大正期から戦後にかけて一般化しつつあった『万葉集』への賛美について嫌悪を示すことも多い。

『万葉集』や『懷風藻』の書名や、人丸や家持の名前がエッセイや小説に出てくることはあるが、その歌や表現について肯定的な評価を下すことはまずない。しかしながら、幼年期には水天宮の七五座で眉輪王の芝居について触れることがあったことを記しているほか、光明皇后の逸話について関心を寄せたこともある。

谷崎の『万葉集』への嫌悪は、上代文学全体に対する嫌悪と同一の感性に根ざすものではない。谷崎潤一郎の古典文学受容を考える上で、『万葉集』は明確に敵意を示したほほ唯一の作品という点で注意すべきであり、『源氏物語』を中心として考えられてきた谷崎の古典文学観を相対化する上でも重要な視座を提示するものであろう。

二 初期における古典受容

谷崎の初期作品に上代文学に対する言述を認めることは難しい。校友会雑誌等を初出とするデビュー前の作品も含め、谷崎の小説に『万葉集』摂取を読むことはできない。比較的初期の自伝的小説といってよい『饒太郎』にも『万葉集』の言及はないし、同じく幼年期の谷崎の姿が投影されているであろう『神童』にもみえない。

ただ、谷崎は大正期に多くの時代物の戯曲を書いている中で、『法成寺物語』のような平安文学を題材にとった作品には、ごくわずかながら平安期以前の文化について触れる場面をみることができることができる。

道長 いや／＼、満更例のない事でもないのぢや。遠い古の話ぢやが、大和国の法華寺にある十一面観世音は、忝くも天平の昔聖武帝の御后光明皇后の御顔を写し奉つたものぢやと聞いて居る。さうして見れば、其方の姿を写し取るのに何の不思議もないではないか。

同作中にはもう一度「古の光明皇后」といった表現がみえる。時期は昭和に下るが「顔世」にみえる師直の台詞も同じことを述べているようだ。

師直 されば本朝の衣通姫、唐の楊貴妃などは、遠い昔の物語の上でのこと、先づそのやうなのは、残念ながら今の世の中には見当たるまいと存ずるな。

道長が光明皇后の御顔を仏像に写し取られた先例を「遠い古の話」だと述べる時代感覚も、師直が「遠い昔」のことが「今の世」に通じないという認識も、谷崎自身が天平文化の時代を「遠く」感じていたことの現れなのである。

ただし「新年雑感」では、漢詩文を取り上げた文章の一節で、徳川時代の漢詩よりも『本朝文粹』や『懷風藻』を高く評価していたことを述べている。

漢文や漢詩文なども、本朝文粹や懷風藻にあるもの、方が、

徳川時代の漢詩人のものに較べて、どんなに真実で、高雅であるかわからない。徳川時代の漢詩は、幫間が漢字を使って駄洒落を云つてゐるか、書生が腕を扼して軍歌を歌つてゐる様なものだ。

少なくとも『本朝文粹』や『懷風藻』といった作品には、「真実」や「高雅」を認めていたことをうかがわせる。ただし『懷風藻』、あるいは『日本書紀』などと違い、『万葉集』の名前が挙がることはほとんど無かった。

三 『万葉集』受容の試み

谷崎の『万葉集』受容を考える上で、「母を恋ふる記」⁽¹⁰⁾のエピグラフは外すことはできない。

いにしへに恋ふる鳥かもゆづる葉の三井の上よりなき渡り
行く——萬葉集——

この『万葉集』(巻二・二一)のエピグラフが持つ意味は、「母を恋ふる記」の先行研究でもあまり言及されることがないように思われる。わずかに千葉俊二が谷崎が現実の母と想像上の母の二面性を追求するなかで、このエピグラフから「いにしえ」の時空にある、「母の国」へとむかおうとする意思を読み取れるのだと指摘している。

しかし、谷崎が後に佐藤春夫の「月かげ」⁽¹²⁾（「指紋」の続篇の短篇で亡くなったR・Nという友人の英文で書かれた遺稿を翻訳したという体裁をとる）からの影響を受けて「母を恋ふる記」

を書いたというところ、谷崎がここで企図しようとしたのは「月かげ」の冒頭の英文レターを模して、作品に最初の異化作用を齎せようとしたものではなかったか。

千葉も指摘するように、大正六年には佐藤春夫との出会いがあり、以降谷崎は佐藤から小さくない影響を受けた。「月かげ」の英文に相当する異化作用を引き起こす詩文として、「母」の面影を想起させるような、子が詠んだ歌として当該歌が選ばれたのだろう。このエピグラフはむしろ『万葉集』が谷崎にとって、「月かげ」の英語と等しいほどに遠い世界の表現であったかを示しているのではないか。

「芸術一家言」⁽¹⁵⁾や「ノートブックから」⁽¹⁶⁾といった評論的エッセイにおいても、上代文学については一切言及がない。漱石、鷗外、露伴といった明治期の作家たちの作品批評が中心である。古典文学についての言及もあるが『万葉集』に触れるところはない。『万葉集』についてはほとんど言及しなかった谷崎がエピグラフに万葉歌を使ったことは、近代における『万葉集』の影響から離れがたかったことを示している。エピグラフ自体は後の作品にも使われるが、『万葉集』を象徴的なエピグラフとして利用する試みは後の作品に引き継がれることはなかった。

四 昭和期における『万葉集』に対する敵愾心

昭和に入ると谷崎は『万葉集』に否定的な記述をするようになる。その比較的初期の様相が「岡本にて」⁽¹⁷⁾にみてとれる。高

校時代には自らも和歌を学んだことがあると言った後に続けて、現代の和歌は猫も杓子も万葉調が流行りのやうだが、ことさら万葉の詠りを真似るのは、素朴なやうであつて実は甚だ匠である気がする。そのくらゐなら技巧を弄した古今や新古今を学ぶ方がまだしも無邪気ではないのか。

と述べている。当世には「万葉調」が流行しているが、それは「素朴」を目指しているやうで、実は技巧を「匠んで」いるから、本来的に技巧的な『古今集』や『新古今集』を学んだほうが「無邪気」なのだと述べる。ここには『万葉集』が素朴かつ実直なうたいぶりを示しているのだという通俗的な理解が見え隠れするが、その素朴さを庶幾しているのが現代の短歌だと認識している。その上で、こうした「素朴」への回帰を欺瞞だと喝破するのが昭和四年時点における谷崎の現代短歌観であつたことに注意したい。ここで直接論難するのは「万葉集」ではなく、「万葉の詠り」であるが、では「詠り」とは何だろうか。そのヒントになるのが『文章読本』である。古語を扱う上での注意を記した箇所^⑧に注意したい。

こ、に古語と申しますのは、明治以後、西洋の文化が這入つてから出来た言葉を新語とし、それに対して、その以前から伝はつてゐる言葉を指して云ふのであります。古語にも神代の昔からある言葉や、徳川時代に造られた比較的新しい言葉や、いろ／＼種類がありませうが、それらのうちで今も尚一般に使用されつゝ、ある言葉、これが一番、何処で

誰が使つても危な気がなく、誤用や誤解の恐れが少ないので、分かり易いと云ふ原則によく当て嵌まる訳であります。

古語の中にも「いろ／＼種類」があるというものの、ここで実際に対比されるのは神代の言葉と徳川時代の言葉という時代の近古の区別であつて、いづれにせよ「今も尚一般に使用」される言葉がよい、なぜなら「分かり易い」からであるという理路になつてゐる。すなわち、言葉の誤用や誤解を避けることがよい表現だと述べているのだが、このような思想は他の箇所にもみえる。

すなわち『文章読本』は、外来語や古語といった現代語の周縁の表現のうちからどのような言葉を、どのように取りこむべきかを問題としてゐる。しばしば指摘される通り、関東大震災以後、擬古文調を取り込んだ文章を模索する谷崎は、古語と現代語を「分かり易く」混合させることをもくろんでいた。これは当然、英語と漢語を含む外来語の利用においても、おなじく理解が容易な日本語にルーツのある語彙の使用がよいと述べるのだが、そこに上代の作品についての言及がみられるのである。

日本語系統の言葉がよいと申しましたが、古事記や萬葉にしか見出だせないやうなものよりも、一般に通用する漢語の方が優つてゐることは申す迄ありません。

ここで登場する「古事記」と「萬葉」にしかみられない表現は、「日本語系統」ではあるが「一般に通用する漢語」との距離を計られ、否定されている。前節でみられたやうに、道長や

師直に語らせた「古」が今では通用しないのだという感覚は、古典回帰を経てより強く谷崎の中に根づいていった。このような「古」にしか通用しない表現を、現代に無理矢理再生させようとすると不自然な表現こそ、谷崎が「訛り」と感じるものであったのである。

五 対話に沈黙する谷崎

耳遠い表現をあえて利用する「万葉調」は、本来現代に通用していない古の表現を無理矢理利用しようとしている点で、谷崎の文章観とは相容れないものであった。

「文章を語る夕」⁽²⁾は、谷崎潤一郎の他、司会の室伏高信、茅野蕭々、後藤末雄、市河三喜、末広巖太郎、辰野隆が参加した座談会であるが、そこに谷崎『文章読本』と『万葉集』を巡る議論がみうけられる。

室伏 これもやはり「文章読本」にあることなのですが、外国語——文体の違ったものには翻訳が十分出来るということを書いてあるようですが、市河さんどうでしょう、英語を完全に日本語にすることは出来ないんですか。「万葉集」を「文章読本」には例を引いてありますが、完全に翻訳するということは絶対に出来ないのでしょうか。

市河 いま「万葉集」をやってるんですけども、困つてます。

室伏の問題提起はわかりにくいですが、外国語や古語を含む文体の違う文章同士を完全に翻訳することは難しく、英語を日本語化することの困難を市河に問うたものと読める。市河の応答は、学術振興会の事業であった『万葉集』の英訳についての困難を吐露したものである。これはローマ字対照の『英訳万葉集』⁽²⁾として発表された。谷崎はここでは応答していない。

続く箇所では方言、古典における翻訳が問題となる。

後藤 鹿兒島の言葉を東京語に翻訳することだって不可能だと思ふね。(略)

谷崎 英語をあまり正確にしようと思わないで、文法は少し位違つても、少し新しい言葉だったらどうかと思ふますが、そういうわけにはゆかないんですかね。それにしても昔のものを訳すことは難しいですね。

市河 それにしても昔のものを訳すことは難しいですね。
室伏 「文章読本」には、日本の古典を外国文に翻訳出来ないということを書いて居りますが、日本の現代語にするのはどうです。

谷崎 それは一寸問題。いまの鹿兒島弁にしてもそうです。が、要するに程度問題ですからね、やればやるほど近いものが出来ますからね、外国語に訳するのは違ふ。

谷崎は英語を現代語訳に翻訳するにあたって『万葉集』を例に出すことを避けている。だから室伏が提起した翻訳の話題に参加せず、後藤の方言の話題を引き継いだのだろう。室伏が『文

章読本」で取り上げた『万葉集』と英訳の問題に対して答えあぐねた側面もあるのだろうが、より現実的には『万葉集』およびその翻訳に敵対的な発言をせずに沈黙することで、現在進行中の『万葉集』翻訳に取り組んでいる市河に配慮したのではないか。

だが、古語から現代日本語への翻訳は「一寸問題」となる。労力やコストはかかるにせよ外国語への翻訳より「近いもの」が作れるだろうという確信は、『三人法師』や『源氏物語』の現代語訳を通じて得た経験が反映されていたにせよ、古典文学を外国語に訳することの議論を嫌っての話題転換だろう。おそらく『万葉集』の英訳について言及したならばその翻訳事業の意義に低い評価を下したであろう。谷崎が古典を現代語にすることについての発言は、『万葉集』翻訳への付度も含んだことまでの話題に対する包括的な応答として読み取れる。『万葉集』翻訳の意義については意図的に無視しているのだ。

「メモランダム」²³では田中館愛橘の詠歌について論じながら、『万葉集』への低い評価をあらわにする。

故博士はローマ字運動を通じて土岐君など、親交があつたであらうから、同君あたりの指導があつたかも知れないが、昔の人は幼少の時に漢学や国文の素養を一通り身に付けてゐた筈であるから、故博士ほどの人物になると、特に歌の修業をしないで此くらゐのものは詠めたかも知れない。私は所謂専門家の歌よりも、かう云ふ人のかう云ふ歌こそ

人の心を動かす力があると思ふ。耳遠い萬葉詠りやくろうと臭いことばが何処にも使つてないところが一層よい。

ここで谷崎は、「萬葉詠り」や「くろうと臭い」表現を「何処にも」使わないことを賞揚してみせる。これは先に『文章読本』²⁴でみてきた、分かりやすい語彙選択とコロケーションを重視する姿勢と重なる。谷崎は短歌においても『文章読本』で述べたことと同じ発想を抱いていたことがうかがえよう。

谷崎の古典観は新村出、吉井勇、川田順との座談会である「天皇陛下の御前に文藝を語る」²⁵からもうかがえる。新村が天皇陛下に「最近の作品の代表的なもの」を話す義務が私らにあるのではないかという話題が出されると、

谷崎（大声で）いや、そんなことをされちゃ困るよ（一
座哄笑）。そうならないでよかった。（笑）

新村

あなたから自作の宣伝に陥らない程度においてですよ……どうも古典的古典的といつて、これまでは万葉集とか古事記、日本書紀、あるいは支那の詩経とかいったように、古典的ばかりに瀬しておつて、御前で芭蕉の俳句でも申上げた人は一人もない。

谷崎

芭蕉の俳句ならいいと思う。

と谷崎は近代の「代表的なもの」を選んで天皇に紹介する役割を否定した上で、「御前」で芭蕉の俳句のよさを語るのはいと述べているのだが、ここで新村が「古典的」な作品として挙げるのが「万葉集とか古事記、日本書紀、あるいは支那の詩

経」だけで、もっと違うものを出してもよいのではないかと述べているのに対して、谷崎は新村が挙げた古代の作品はすべて無視している。当然、『万葉集』についての言及も避けている。わざわざ言及するほどのことでもなかったかとも思われるが、先の室伏らに対する発言も考えあわせると、対談で「古典」の話がでたとき、谷崎はその話題を忌避するように振る舞っているのである。

『万葉集』への言及を避けることは、当時の文壇において、特殊な古典観を表明する政治的態度であつたらしい。折口信夫、川端康成との鼎談であつた「細雪をめぐって」⁽²⁵⁾から伺うことができる。『細雪』の作中年時についてひとしきり話したあと、短歌の話題へと転じる。

折口 短歌はずいぶんお作りになるようですが、初め誰かの影響を……？

谷崎 いえ、お恥しい……。誰の影響ということもなくて……。

川端 やっぱり「古今集」がお好きですか。

谷崎 ええ、好きですね。どうも「万葉」は好かないな。どうしても好かないな。

川端 「古今集」がお好きで、「万葉」がお好きでないとおっしゃるのだから……大したものですね。

折口 「万葉」、「万葉」といいますけれども、われわれでもよく考えると、ほんとうの「万葉」の姿で歌を作っ

たことはありません、万葉風の歌人なんていうて人でも、殆ど「万葉」の形の歌は作っておりません。谷崎 あ、それはそうでしょうな。

折口 茂吉さん初め、やっぱりそうです。個人的万葉集調です。

川端の「大したものですね。」という短い応答は、当時の『万葉集』が持っていた文壇的権威を証してあまりあるだろう。川端康成もテレビドラマの脚本である「たまゆら」で『古事記』や『万葉集』を取りこんでいたし、折口を前にして、ただの好悪の表明という形ではあれ「万葉」を否定してみせた、谷崎の「好かない」という素朴な一言は驚きに値する。これは本来ならば、市河を前に言いたかつた言葉だつたのではないかとすら思われる。

戦中、国文学者の石井庄司「古典の探究」(第一書房、一九四三)は、一般民衆が積極的に「醜の御楯」や「御民」といった万葉語を取り込んでいく状況を「萬葉集の歌の洪水と氾濫」だつたと記した。大正期以降の俳句にも「万葉調」がみられ、昭和初期の国語教育の世界にも『万葉集』が読まれるべきであると指摘し、『万葉集』が日本人の精神を体現するからこそ愛好されるものであると考えていた。この発想の根底には、久松潜一『万葉集に現れたる日本精神』(至文堂、一九三七)があつたのだろう。ベストセラーになつたこの本は、第二次世界大戦を前に日本人の精神と『万葉集』との蜜月を象徴するものであつ

た。⁽²⁶⁾石井の著作が出版されてより七年後、戦後で谷崎が述べた「どうも『万葉』は好かない」という一言は、一小説家の好悪を越えた意味を持ちえたのである。

六 好かないものとしての『万葉集』

見てきた谷崎の記述から『万葉集』を「好かない」理由を読みとることができるだろう。現代語のなだらかさを、ほぼ使われない古典語が破壊してしまうことに対する嫌悪である。

しかし、谷崎が「通用」しないとみなした表現も、一般大衆の側がそれを乱用するならば、谷崎もまた『万葉集』や『古事記』の古語を使うことを認めなければならぬはずだ。当然、谷崎自身も『万葉集』が『源氏物語』に並ぶ関心を集めていたことは無視できなかつた。

「源氏物語の現代語訳について」⁽²⁷⁾ではこのようなことを書いている。

(稿者注・源氏物語の注釈書類は) 明治から以後はますます微に入り細を穿つといふ風で、すでに今日までに数種の原文対訳書も出で、私がこの仕事にとりかゝつてから以後も、新進の国学者に依つて、盛んにさういふ著述が出版されてゐる現状である。恐らく萬葉を除いては、源氏くらゐ、注釈書に富んだものはないのであるから、それらの先人や現代の学者達の業績を参考にすれば、意味を汲み取る上で困難は先づ少い。

『源氏物語』は『万葉集』と注釈書の数において並ぶ。その現実には谷崎は触れざるを得なかつた。谷崎の国文学／国史研究の進展に対する関心は「直木君の歴史小説について」⁽²⁸⁾にもみられ、研究の進展を歴史小説の史実性が向上してきた要因として理解している。『源氏物語』現代語訳の執筆にあたって、山田孝雄、後には玉井幸助らの助力を得ていたように、谷崎と国文学研究との関わりは深い。岩波書店から『日本古典文学大系』が発刊されたときには推薦の言葉も寄せていたし、「小野篁妹に恋する事」⁽²⁹⁾では正確な訳出のために新村出に問い合わせをしたことも作中に記している。谷崎が利用しようとした国文学の研究資源に目を配れば配るほど『源氏物語』以上に、数多く存在した『万葉集』の参考書を見ることになつたのだ。谷崎もまた、一九四〇年代を覆つた『万葉集』の「洪水」と無関係ではいらなかつたのである。

それは当然谷崎の知人や友人たちとの芸術上の交渉にも影響を及ぼしてははずだ。かつて論戦を交わした芥川龍之介は「文芸鑑賞講座」⁽³⁰⁾で「もし古語に耳遠い人があれば、その人は歌人を非難するために、略解を詠むなり古義を読むなり、御自身まづ古語の稽古を積んでかからねばなりません」と述べていた。近世に広くよまれた橘千蔭『万葉集略解』や明治天皇への観覧を機に公刊された鹿持雅澄『万葉集古義』なりを通じて「古語」を学んでから歌人を批判すべきだという意見は、谷崎の『文芸読本』との間に埋めがたい隔たりを読み取らずにはいられない。

芥川との論争では『万葉集』の話題など微塵も出さなかったが、芥川と谷崎は『万葉集』をはさんで正反對の詩歌観を選び取るまでに断絶しているのである。

芥川以上に『万葉集』観において谷崎との隔たりをみせるのは佐藤春夫だろう。佐藤の『万葉集』やその歌に対する言及は数多いが、吉井勇『酒ほがひ』の解説に次のような言葉をよせていた。

自分は堀口と違つて夙に三十一文字の歌は断念してしまつたが、勇の短歌は自分の欣求してやまぬ詩の最も短い一体のやうに思はれたがためである。——そこには万葉集と近代とが茂吉らのものとはまた別個の様相で握手してゐる。自分は万葉集を開いてみて第四卷に

ここに於て筑紫やいづこ白雲のたなびく山のかたにしあ
るらし

を見る毎によく吉井勇の歌が一首ここに封じ込められてゐるやうな気がしたものであつた。

この記述は、佐藤が『万葉集』の中に近代を透かしみていたことを逆説的に示している。谷崎の周囲においても、古代の『万葉集』が近代化と共に押し寄せていたのである。

その一方で、谷崎自身も『初昔きのふけふ』の東見本に書き込んだ詠草中に次の歌を書き留めていた。

五月十九日森田肇君出征の国旗に
やすみしつ、我が大君のしろしめす海の守りの征くかます

らる

配列から昭和一九年（一九四二）の詠と推定されている。用例典拠を挙げるまでもなく「やすみしつ、」や、「我が大君のしろしめす」という表現は、谷崎が疎んだ「万葉調」そのものだといつて過言ではない。出征に臨んで求められたであろう和歌が「万葉調」であつたことと、『万葉集』を好きでなかつたことはどのように考えるべきなのであろうか。

「万葉調」の詠は佐藤春夫にも送っている。昭和七年（一九三二）一月の日付がある佐藤春夫の子息方哉の誕生によせた手紙に『古事記』を引用して「マサヤはまことに良き名といふべし」と書き付け、

大神のみつらにまかせ勾璽の美須萬流の珠ゆ御子は生れま
しぬ

古のまさやの神の名にし負は、まさしくたくそたてみと
り兒

という歌を送る。また、辻小説「莫妄想」には、

兄さんは、今度も蒙古の時のやうに神風が吹くと思ふかい。吹かなくつてさ。たゞ天照皇大神は、我々が武備に最善の努力を致して、太平洋に敵を圧する戦艦や戦闘機を続々と造り出すのをご覧になつてから神風を送つて下さるんだよ。などという文言を平然と載せている。「莫妄想」はもともと

ラジオ原稿であつたのだが、谷崎の校正を経て公開されたものである。書かれている内容自体にはまったく信をおいていな

かったとしても、必要とあらば戦争協力のポーズをとることに、強い抵抗を抱いていなかったことは間違いない。アジア・太平洋戦争中において「通用する」表現を好んだ谷崎の中では、「万葉調」への反発と「神國日本」への賛同が矛盾せずに同居していたのである。

また、戦後の作品「新春試筆」五首⁽³⁶⁾のうち。

大君は神にましまさず現身^{うつしなみ}の人にましますぞめでたかりける

という歌を詠み、天皇の人間宣言（一九四六年一月一日）を言祝ぐ歌も寄せている。谷崎詠の大半は、新古今風を庶幾する凡庸な日常詠であると思うが、折口らとの対談で折口が「万葉」の形の歌と「万葉調」をわけ、現代の歌人達は所詮「万葉調」にすぎないという説に谷崎が同意していたことを思い返すとき、谷崎は「万葉調」を疎みながらも、それと距離を取ることの難しさとも付き合わざるを得なかった姿が浮かび上がってくる。相手が求めるのであれば、それらしい「万葉調」をも詠んでみせるしたたかさの一方で、対談における谷崎の沈黙は大正末期から戦後にかけての『万葉集』の洪水に対するささやかな抵抗でもあったように思われる。第二次世界大戦のさなかに文学が動員体制へ貢献するように求められていた時代にあつて、谷崎潤一郎の難しい立場と容易には解明できない複雑な内面を示してあまりある。

七 上代との和陸

『万葉集』への忌避は、晩年になって和らでいったようだ。『瘋癩老人日記』に、『万葉集』の歌が登場する。

楯彦ハヨク漢詩ヤ和歌ヲ書キ添ヘル癖ガアルガ、コレニモ
萬葉ノ和歌歌ガ一首縦ニ一行ニ添ヘテアル、

吾カ勢^せ子^こはいつく遊^ゆくらんおき津ものなはりのやまを気
布^ふカ古^こゆらん

『万葉集』の表記と現代での読みを示す。

当麻真人磨妻作歌

吾勢枯波 何所行良武 己津物 隠乃山乎 今日香越等六
わがせこは いづくゆくらむ おきつもの なばりのやま
を けふかこゆらむ⁽³⁸⁾（卷一・四三二）

この歌は伝未詳当麻真人の妻が旅先の夫を思い、今日は名張の山を越えているだろうと想像して偲ぶ歌である。ここで漢字と仮名と万葉仮名（気布等）混じりの文で書かれた万葉歌が登場するのは、楯彦が自分を思ってはくれない妻の颯子に対する当てこすりとして機能しているのだろう。

『万葉集』を象徴的に作中に利用することは、大正期から戦後にかけての谷崎にはほとんど見られず、最晩年に至って古代的、神話的なものへ関心を寄せるようになったことを示している。絶筆の手控えに記される「魍魅子」「閻伽子」のような凡そ現実には存しえない名前の書き付けからうかがわれる、つい

ぞ書かれなかった小説の神話的な世界や、「丑」³⁹のメモにおいて『鍵』の構想を記したものの末尾に、

◎光明皇后と弥生ちゃん。

という一文があることも谷崎の奈良天平文化への、そして神話的世界への接近をうかがわせる。癩病を治癒する光明皇后の神話的性格を弥生の中にみいだそうとしていたのかもしれない。思えば水天宮七五座でみた眉輪王の話を「日本書紀や古事記の記すところ」に則り記そうとしたのも、晩年といつてよい年齢の時であった。しかし、これは『万葉集』に対する全面的な和解ではない。

谷崎は「竹柏園大人の文藻」⁴⁰という、『佐佐木信綱文集』、『佐佐木信綱歌集』両書の「推薦の詞」を書いている。佐佐木信綱の授業で催馬楽について習った記憶をしたためているが、『万葉集』については一切触れていない。同じ推薦の詞には久松潜一が「佐佐木博士と萬葉集」を寄せており、当時において、佐佐木信綱は歌人であると同時に万葉学者としての側面を無視しがたかった。谷崎と佐佐木は書簡のやり取りが残されており、信綱の百首歌から四首を書き抜いて返事をしている。⁴¹しかし、佐佐木信綱の「万葉学者」としての側面に対して『万葉集』を称える言葉を返すことはなかった。

八 おわりに

古典芸能や文学を愛した谷崎潤一郎にとって、『万葉集』は

ほぼ唯一嫌悪を表明した作品だった。谷崎の古典受容の中では、『源氏物語』が実作の中に取り込まれ、現代語訳を通じて深く探究されたものであった一方で、『万葉集』はその影に位置するような、無視しようとするほど目に入ってくるようなものであった。『瘋癩老人日記』に引かれた揮毫が『万葉集』との和解を意味するものではなかったにせよ、谷崎が最晩年に至って神話の世界へ目を向けたことは注意されるべきだろう。その神話的空間は谷崎の文業にとって源氏的なものからの離脱をも示唆するからである。

一九四〇年代におけるアジア・太平洋戦争の高揚の中で起こった『万葉集』の流行とも谷崎は無縁ではいらなかった。谷崎潤一郎にとって、「古典」とは常に日本を代表しようような民族の象徴などではなく、また『源氏物語』を前に平安文学の美学に愉悅するものでもなく、時に呪いのように我身にまわりつくものでもあったことを忘れてはならないのだろう。

付記

特に断りがないかぎり、谷崎潤一郎著作の引用は『谷崎潤一郎全集』全二六巻（中央公論社、二〇一五～二〇一七）により、インタビュー・対談は小谷野敦、細江光編『谷崎潤一郎対談集・文藝編』（中央公論社、二〇一五）により、初出のみ示した。著作については、単行著作は「」、連載、エッセイ、短篇は「」で掲出した。本研究は特別研究員奨励費（21J00181）の助成を受けたものである。

注

- (1) 『細雪』は昭和一九年(一九四四)七月に上巻、昭和二二年(一九四七)二月に中巻、昭和三年(一九四八)一二月に下巻が刊行されている。上中巻は当初戦中であつた事情もあり私家版として頒布され、刊行に至るまでの複雑な事情を考えるべきであろう。
- (2) 昭和一四年から一五年にかけて初度の『潤一郎訳源氏物語』が、昭和二六年(一九五一)五月から二九年(一九五四)一二月にかけて『潤一郎新訳源氏物語』として二度目の現代語訳が発刊され、昭和三九年(一九六四)、同四〇年(一九六五)には『谷崎潤一郎新々訳源氏物語』が刊行されている。いずれも中央公論社刊。ただし、新訳と新々訳との間には仮字遣の変更以外に大きな違いはない。
- (3) 谷崎の古典受容については、長野晋一『谷崎潤一郎と古典大正統・昭和篇』(勉誠出版、二〇〇四年一月)、同『谷崎潤一郎と古典 明治・大正篇』(勉誠出版、二〇〇四年一月)などがある。
- (4) 昭和三一年(一九五六)『文藝春秋』初出の『幼少時代』「お神楽と茶番」には、水天宮七五座と眉輪王の神話について『日本書紀』『古事記』にあたって記した極めて詳細な記事がある。
- (5) 大正三年(一九一四)九月一日、「中央公論」初出。
- (6) 大正五年(一九一六)一月、「中央公論」初出。
- (7) 大正四年(一九一五)六月一日、「中央公論」初出。
- (8) 昭和八年(一九三三)八月〜一〇月、「改造」初出。
- (9) 大正七年(一九一四)一月一日、「やまと新聞」初出。
- (10) 大正八年(一九一九)一月一八日〜二月一九日、「大阪毎日新聞」初出。
- (11) 千葉俊二「母を恋ふる記」とその前後」(紅野敏郎編『論考 谷崎潤一郎』桜楓社、一九八〇年五月)。
- (12) 大正七年(一九一八)三月一日、「帝国文学」初出。
- (13) 阿片中毒で亡くなった友人 R・N の遺稿が記したとされる、*Night after night I passed sleeplessly* から始まる英文で、不眠の夜に月光に誘われるまま外に出て美しい石像をみていると、幻と思われた帆船の帆が石像の背後に訪れるところで終わっている。阿片常習者であつたらしき R・N の幻視は「母を恋ふる記」に内面を描く幻想的な描写を与えたのであろう。もはやマンネリ化したものですらあつた。だからこそ、谷崎は「母」を巡るテーマに幻想的な異化作用を求めたのだろう。
- (14) 千葉前掲論文。
- (15) 大正九年(一九二〇)四月一日〜一〇月一日、「改造」初出。
- (16) 大正四年(一九一五)六月一〇日〜九月一〇日、「社会及国家」初出。
- (17) 昭和四年(一九二九)六月三〇日、「夕刊大阪毎日」初出。
- (18) この「現代の和歌」が具体的にどの歌を示すのかは判然としないが、折口と川端との鼎談を考えると斎藤茂吉を意識したものがと思われる。
- (19) 昭和九年(一九三四)一一月五日、中央公論社。書き下ろし。

- (20) 野口武彦『谷崎潤一郎論』(中央公論新社、一九七三)。
 (21) 昭和一〇年(一九三五)七月、「経済往来」初出。
 (22) 日本学術振興会『英訳萬葉集』(The Manyōshū、岩波書店、一九四〇/訂正三版、一九四八)。榎戸涉吾氏から御教示をいただいた。
 (23) 昭和二七年(一九五二)六月八日、「毎日新聞」学芸欄初出。
 (24) 昭和二二年(一九四七)九月、「小説新潮」初出。
 (25) 昭和二四年(一九四九)三月、「文学界」初出。
 (26) 小松靖彦『戦争下の文学者たち』(二〇二一年一月)参照。
 (27) 昭和一三年(一九三八)二月一日、「中央公論」初出。
 (28) 昭和八(一九三三)一〇月、「文藝春秋」初出。
 (29) 「古典は原文で読むのがほんたう」。昭和三二年(一九五七)頃か。
 (30) 昭和二六年(一九五二)一月一日、「中央公論」初出。初出題は「篋日記」を読むであったが、『潤一郎文庫 第十卷』(中央公論社、昭和二八年九月一〇日)に入れる際に改題。
 (31) 大正一三年(一九二四)一〇月一〇日、「文藝講座」初出。
 (32) 昭和三三年(一九四八)五月一〇日、吉井勇『酒ほがひ』(光文社)の解説。引用は『定本 佐藤春夫全集』によった。
 (33) 『谷崎潤一郎全集二六卷』(中央公論社、二〇一七)「歌稿」中に「初昔 きのふけふ」として、まとめられている。正確な成立年時は不明だが、解題によると昭和一八年(一九四三)四月二九日の『初昔きのふけふ』の刊行に前後して、昭和三二年

(一九五七)までおそらく編年体、それ以降は錯雑しているという。刊行の意図はなかった詠歌と考えられる。

(34) 『谷崎潤一郎全集 二四卷』中央公論社、一九七四。手紙番号は一三六。

(35) 昭和一八年(一九五三)三月九日、「朝日新聞」初出。

(36) 昭和二五年(一九五〇)三月一日、「心」三月号初出。

(37) 昭和三六年(一九六一)一月一日〜昭和三七年(一九六二)五月一日、「中央公論」初出。

(38) 本文と訓は『新編国歌大観』による。

(39) 昭和三二年(一九五六)一月からはじまる『鍵』の構想から書き出される創作ノートの一つ。昭和二八年(一九五三)六月以降に書かれた創作ノートである「子」に続くノートと思われるが、終筆年次はわからない。

(40) 書かれたのは昭和三〇年(一九五五)頃のものと思われる。『佐佐木信綱文集』は、昭和三二年(一九五六)に竹柏会から刊行された。

(41) 『谷崎潤一郎全集 二四卷』(中央公論社、一九七四)。手紙番号は六六〇。

(うめだ・けい) / 日本学術振興会特別研究員P.D、日本体育大学・青山学院大学・早稲田大学非常勤講師、早稲田大学総合研究機構日本古典籍研究所招聘研究員)